

歳暮

同

日毎く事のいろきにろこすまにいつしかきぬるとしの暮かな

白虎隊

外員

杉村英夫

(三重韻)

一

名も若しると聞くからに

城は巖いははに幾春も

榮ゆる色の若松と

思ひこそすれ遠永に

誰か嵐の吹くそども

知らむや變る色なると

さはいへ月も烏玉に

變るや秋の霄のくも

昨日千歳の色れあど

今日はこちふくさ嵐に

消ゆるは悲し知るとても

是や浮世の習そと

二

はや傾きし旗のいろ

かへす力もなく人の

涙も染みて枯せ初めし

色若松の守りしる

いざ言寄せん敷嶋の

櫻は胸に小夜あらえ

散りてかばしき花のいろ

吹かはしるさや白河の

關の守りは曉あけのはし

消えて越路の空のいろ

雪うと紛ふ幾萬の

敵は二手に旗しるし

三

父と捧けて露の身を

覺束なくも聞くものを

袖に名残は胸の血を

泣けは泣かるゝ身は門を

四

勇み乗せ出す一とあらて

流石花をど色見えて

父には未だ今朝出てゝ

敵寄せつるか暫しまて

五

血烟分りて血烟に

敵のいくさの數々に

斃せて已むと聞くからに

さなり進めど聲々に

六

色美しささらぬたに

兄は忘せて塵のたま

などためろはん世のいとま

染めて哀の露のたま

あとに心の引かれこま

見れば年はもゆかしやの

散るこそ惜めちる花の

會はぬ心を筒音の

切れ味みたま試さん打物の

亘る飛鳥も多ければ

されどたゆむなは及もあらは

斃れて我は起きませは

形に影の一軍は

守るは茲に城一つ

よくあそ死なり母か持つ

消えんと急ぐ様を見つ

片齒に袖を二つ三つ

顔美しき身固めは

心を知れる心よは

打ち驚かす山のきは

小腕こでんかからも一雉は

支え兼かたぶつても見ゆるうな

折るゝまで斬せ此かたな

敵はなひかん風にはな

今たえゝくに數少な

肌はだと紅葉の錦着て

いとゝよほひはまさりけり

息つゝかじと血刀に

また飛ぶべふもあく胸に

事こそやみね今こゝに

七

咲かてちれどは誰かいひま

花にもまして美しゝ

恨は千々のさゝれいし

ほしくば取をよ此のしるし

すかる山路は秋ふけて

戦の様の思はれて

敵は出潮の鯨波上げて

哀をやくゝに羽脱りとぞ

見れば口惜し身の終り

城は捲かるゝ黒けふり

春待顔の初つばみ

死してならまし軍かみ

うつとも消えじおきつなミ

いさよと城の火を睨み

操は胸にてるわかさ

ねぎて捧りよ人よぬさ

寄するか如き敵よいさ

血をかむ牙の凄まじし

雜 錄

長崎佐賀地方修學旅行日誌一班

教 授 笠間 益三 閱

武藤 虎太 稿

毎年春秋二期。我校例ニ修學旅行ノ舉有リ。昨秋福岡地方ニ至リ。今春八代ニ遊ビ。而

シテ今秋ハ則長崎佐賀地方。修學旅行ノ舉有リ。十一月十日ヲ以テ途ニ上リ。二十日

歸校ス。今其梗槩ヲ錄シテ。後日ノ追憶ニ供ス。然レモ固ト是レ行旅ノ間。耳目ノ命